

〈講演〉

リカードの『経済学原理』とその周辺 —第53回経済資料協議会総会記念講演—

櫻 井 毅

(武蔵大学学長)

ただ今ご紹介をいただきました櫻井です。図書館の方が多く、皆さん書誌学に関係があるということなので、なんとかそれに近い話もしなければいけないと思って準備をした次第でありますけれども、なにしろ私は書誌学とは全然縁がありませんので、お役に立つ話になるかどうか分かりませんが、なんとか努めさせていただきたいと思っております。

ところで、初めにお断りしておかなければならないのですが、私、今日万全の準備をして、お話しするわけではありません。もともと忙しいものですから、講演は難しいとお断りしなくてはと考えていたのですけれども、結局お引き受けすることになって、あまり準備しないでもお話しできる範囲でやらなければならぬと考えまして、リカードを実は選んだ訳なのです。

といいますのは、私が経済学の本で最初に読んだのが、実はリカードの『経済学原理』だったのです。古本で買ったのですが、ゴンナー版というがありまして、小泉信三氏の難しい翻訳を見ながらですが、英語で読んだ最初の経済学の本がリカードの『原理』だったものですから、その本については、その周辺のことも含めていろんな記憶が残っている。そういうことだったら多少お話ができると思って、今日は、「リカードの『経済学原理』とその周辺」というようなことで、お話をさせていただくわけでございます。

私自身、その後、大学院に入りますと、翌年には修士論文を出さなければならぬ都合がありましたから、何を書こうかと思案していた時に、とりあえずリカードで何か書こうかと考えていました。すでに読んでいるわけで、内容はある程度知っていたし、リカードの『原

理』の初版を読んで比較すると面白そうだなと思ったこともあります。英文ですけれどもリカードの『全集』がすでに出ていたわけですね。ところが、他方、並行的に一といっても、それも実はリカードに関係はあったのですけれども——欧米で論争の始まっていたマルクス経済学のいわゆる転形問題という新しい問題にも関心がありまして、大学院の研究テーマからすれば、むしろ転形問題について論文を書きたいと考えていたのですけれども、転形問題の方はうまく論文がまとまらない。昭和31年の頃なんですけれども、日本には研究している人がほとんどいないし、だいたい問題点が分かっていない。ミークなんかと手紙を取り交わしたりしてやってたのですが、問題がうまく理論的に整理できなくて、なかなかまとまらない。丁度その頃やはりその問題に興味を持っておられた玉野井芳郎先生のお宅に何度もお邪魔して意見を求め、ご指導を受けたのですが、それでもどうもうまいかない。時間も切迫しているものですから、やむを得ずリカードで修士論文を書いて出した、という事情があります。丁度リカードの『全集』がその頃イギリスで完結したということもありました。日本語の翻訳はまだまったく企画もされていませんでしたが、『リカード全集』の第1巻の编者によるイントロダクションを再三読みまして参考にした反面、その编者のスラッフアの解釈はおかしいのではないかなというようなことを含めて、論文を書いた記憶があります。また、当時私は、父に『リカード全集』のその英語版10巻全部を——だいたい2万円くらいした記憶があるのですけれども——無理して買ってもらいまして、その点でも忘れ難い経済学者なのです。当時、大学卒の初任給が2万円にも満たない状況でしたから、非常に高かったという記憶がありますけれども、とても嬉しかったし、とても役に立ちました。そんなことで、馴染み深いリカードを今日のテーマに選んだのだということをお話を、あらかじめお含みをいただきたいと思います。

前置きばかり長くなって申し訳ないのですけれども、先程、私が書誌学にも興味があるのご紹介いただいたのですが、私は、書誌学がどういふものなのか実は何の知識もありませんし、全くどういふことなのか分かりません。それで、なるべく、自分で考えてそれに関係がありそうなことをお話ししようと思っているのですが、私、リカード

とその周辺ということで今日は三つ位、お話ししようと思って考えておりました。一つはリカードその人についてのこと、二番目にリカードが『経済学原理』を書くに際してジェイムス・ミル——有名なジョン・スチュアート・ミルの父親ですけれど——そのミルの貢献というものがかかなりありまして、それがミル＝リカードの往復書簡の戦時中の発見及び戦後の『全集』による公表によりまして、その辺の事情がよく分かるようになってきたということがある、その辺が第二番目。そして、第三番目にリカードの『原理』が初版から三版まで出ておりますけれども、その違いはいったいどこにあるのかということ、その三つ位をお話ししようと思っています。

1

さて、まず最初に、リカード自身のことでありますけれども、皆さん方は図書館でカードを作っておられる。今はコンピュータ検索かもしれないけれども、少なくとも昔は作りました。その時、リカードという分類でリカードとカタカナで書く時、表示にずいぶんいろんな違いがあることにお気付きになるんじゃないかと思うんです。リカードっていいまでも、昔からいろいろな書き方がありまして、リカルドォと書くのもあるし、リカルドウと書くのもありますし、私がやっているように、リカードとドで止めてしまうのもありますし、最近では、リカードゥと書くのが多いです。先程言いましたように、この種類は、ちょっとこの間数えただけで、七、八種類すでにありました。いづれにしても、いろんな人が、いろんな風に読むのだけれど、もともととは一つで、それをカタカナで表示する、その困難さが出てくるような気がします。最近では、リカードゥというのと、リカードとドで止めるのが辞書などで多くなっていますね。だけれども、-do をドウと言うのは、おかしいのではないか、リカードォだという説もあって、どちらでも良いようなものですが、いづれにしても Ricardo というのをカタカナでいろんな読みをしているという話ですから、元は一つですから、どちらでも良いようなものでしょうけれども、カードに記入したりするのに統一されてないのかな、あるいは検索する時に、どの表記

で調べるかによって、全然文献が出てこないかもしれないな、と思うたりもします。多少は、書誌学的な話しになっているでしょうか。

ところで、デイヴィッド・リカードという人、名前からして、もとのイギリス人ではないということはすぐお分かりだと思うのですが、けれども、どういう出自の人かということについては、実は、あまりよく分かっていないらしいですね。オランダ系の移民で父親はアムステルダムからロンドンに移住してきた。そして、祖父のジョセフ・アブラハム・リカードがアムステルダムでは結構有名な存在だったことは記録に残っています。それははっきりしている。その先を辿っていくと、その三代前までは分かっているらしいのですが、もっと前のことになるといベリア半島のどこかのキリスト教に改宗したユダヤ人であろう、ということで、そんなにはっきりしない。ホランダーという人がだいたい前にリカードの伝記を書いているのですが、その人は、イタリアのリボルノという自由都市を経て十八世紀にオランダにやって来たと書いています。しかし、『リカード全集』の編者のスラッファは、その証拠は無いと否定しています。ただ最近新しく伝記を書いた Weatherall は資料を発掘して、ホランダーの説をむしろ補強し、リボルノ在住は確実としています。いずれにしても、リカード自身の詳細な伝記というのは、まだたくさん無いのです。今挙げたウェザーオールの本（1976）は『全集』その他の新資料を利用している点で、案外そのうち標準的な文献になるのかもしれないと思っています。

もっとも一番基本的な伝記、すべての人がそれに依存している伝記というのがありまして、それは、「デイヴィッド・リカードの思い出」という短いもので、リカードの弟が書いたと言われています。Annual Biography and Obituary for……, 「1823年の死者の略年譜」というのですか、そういうようなものに無署名で載っているといわれていますけれども、これは、リカードの論文の日付の誤りというのが、たまたま弟モーゼスと言う人の手元に置いておかれたものと共通の誤りを持つために、たぶんモーゼスという弟が書いたのだらうと論拠づけられているわけですね。リカードは、ご承知のように、後に大変な金持ちに成るわけですが、リカードの伝記をさらに書き続

けようとしたモーゼスに対して、家族たちが、自分の先祖がユダヤ人でしかも商人だったということを知られると自分たちの名誉に関わるから、書かないでくれと頼んだという話があって、結局その先を書き続けられなかったのだというエピソードも残されております。

本当のことは分からないとしても、リカード家は今でも続く名家ですから、先祖に多少の脚色はあっても不思議ではありませんが、とにかく、迫害されてイベリア半島に集まったユダヤ人の中で、迫害のために改宗してキリスト教徒になって姿を隠して、そのうち段々近代になって規制が緩やかになってきた時にユダヤ教に戻り、最終的にはオランダを経由してロンドンに住み着くことができた、という先祖を持つ人だということだろうと思います。いずれにしても、ユダヤ人ではありませんけれども、非常に裕福な家庭に育っていて、しかも初等教育しか受けていない。2年間だけオランダのアムステルダムの親戚の家に行きまして、有名なユダヤ人の学校に通ったという記録があります。その学校は、スピノザも学んだ学校だと言われていますけれども、初等程度の教育しか受けていなくて、従って、大学教育は受けていない、アカデミックな訓練を受けていない。そういうことが『経済学原理』を書く上に大きな支障になるという話が後に出てくるわけです。しかし、彼が高等教育を受けてないからといって、いろんな知識を得てなかったわけではありませんで、金持ちだったものですから家庭教師をどんどん付けてくれて、自分の好きな勉強はいくらでもさせてくれたようですね。そういうところから、地質学とか鉱物学であるとか、あるいは数学であるとか、そんなことに対する興味、後にそういう学会にも入りますけど、そういう興味が出てきたのかもしれませんが。だから、当時のいわゆる古典教育、ギリシャ語とかラテン語とかの教育を受けていないということだけにすぎないと考えることができるかもしれません。その頃ロンドンに住んでいたユダヤ人はスペイン・ポルトガル系の裕福なユダヤ人とドイツ・東欧系の貧しいユダヤ人とははっきり分かれていたようですね。リカード家が裕福であったことに間違いありません。

ともあれ、父親は証券業者、イギリスのロンドンの証券業者でありまして、子供のリカードつまりデイヴィッドも14歳から父親の元で働

かされた、かなりの仕事を若いときから任されたと言われております。ところが、彼が20歳の時に家が引っ越しました。その引っ越した家の隣か、あるいは非常に近所にウィルキンソンという医者がおりました、そこに娘がいました。彼はその娘と恋愛関係におちいって、結婚するということになりました。21の時でしたけれども、ウィンキルソン家はもちろんキリスト教で、クエーカー教徒だと言われてますけれども、今お話ししたようにリカードはユダヤ人ですから、キリスト教徒と結婚するなどとはとんでもないということで、特に母親から非常に厳しく言われて、勘当されてしまうわけですね。父親もちろんそうでしょうけれども、特に母親の力が強かったと言われてます。といいますのは、母親が後に亡くなっ後、リカードは実家の父親とですね、よりがまた戻ってくる、和解してくるんですね。ですから、父親よりむしろ母親の影響が強かったのだろと思うのですけれども、とにかく、彼は家庭の反対を押し切ってプリシラ・アン・ウィンキルソンという女性と結婚しまして、そして、キリスト教に改宗してしまうんですね。で、その事によって、ユダヤ人たちは、ユダヤ人の息子がユダヤ人以外の者と結婚するときには、死者に対する祈禱というのを行って、もう死んじやった者として扱うという風にいられてますけれども、そういう祈禱が行われたかどうか、証拠はないそうですけれども、とにかく、そういう処遇を受けて家から追い出されてしまった。ただ当時の上層のユダヤ人の間では宗教的に寛容な状況が生まれつつあったという事も事実のようです。

ともあれ、そうなると、21になった息子はですね、生きていかなければならないわけだけれど、知っているのは証券業界だけですから、証券業界で働こうとするんですが、非常に若い有能な青年だったせいで周りの人が非常にリカードに対して好意的に支援してくれたのですね。特に、お金も使いたいだけ使いなさい、というような、資金を提供してくれる銀行家もいて、商売が非常に順調にいて、すぐにジョバー、今はイギリスではいわゆるビッグバンでそういうものは無くなってしまいましたけれども、自分である程度債券などを売買できるという職業で、単なるブローカーではない役割ですけれども、最終的にはジョバーに成るわけです。あつという間に父親と同じ、あるいは、も

う、父親よりもっと商売がうまくなりまして、裕福になったといわれているわけです。初めは、ブローカーとして出発したらしいのですが、すぐに、いまいったように自己取引ができるようなジョバーとして活躍を始めたリカードですけれど、その当時は、株式会社というのはほとんど無きに等しいわけですから、証券市場と言ってもほとんど国債ですね、いわゆるコンソル公債の売買、そういうことで、リカードはどんどん儲けていくわけです。その辺の話も、なかなか面白いのがあるのですけども、一つだけお話ししておきますと、1815年の6月14日、三千六百万ポンドの戦時公債が発行されたわけですが、その発行された日というのが、実は、ナポレオンの敗れるウォターラーの戦いの四日前なんですね。その時は公債の値段はどんどん下がってしまった。というのは、ウォターラーの合戦ではナポレオンが勝つだろうという予想が圧倒的でしたから。そういう時にリカードは引き受けた。リカードはその当時有力な公債の引受業者でした。彼は他の三人の引受業者と一緒に全額引き受けます。公債の価格は下がっており、引受業者の得られるプレミアムはかなり高くなっており、貸し手には極めて有利だったんですが、もちろんリスクもありました。それがウォターラーの予想外の戦勝によって——お客も待たずに慌てて出港させた貨物船によって勝利の情報はもたらされたといわれていますけれども——急騰した。とにかくそれでリカードは大変な大儲けをするわけですね。その間のエピソードとして、マルサスから買ってくれと頼まれて、マルサスに五千ポンドの割り当て分を確保したのですが、マルサスが心配して早く売ってくれというので、すぐ売ってしまってあまり儲からなかったという話もありますけれども、リカードはじっと持っていて、最後に大儲けする。その利益は大変な利益で、とても今でどの位かといえないくらいですけれども、当時七十万ポンドくらいの利益を得たといわれております。そんなことをお話しして時間をつぶすのもなんですので、残念ですけど、この位にします。

リカードについて、お手元に資料としてお渡ししたものの中に、私が昔作った「リカードの生涯」という年譜があると思いますので、御覧になってください。リカードのことはこれにだいたい書いてあると思いますけれども、1799年に、妻の病氣保養に来ていたバースで偶然

巡回文庫にあった『国富論』を読むと書いてあります。バースでリカードはたまたま『国富論』という本を見付けた。で、ぱらぱらと読んでみたら面白そうなので、これを借り受けた。そして、読んでみた。それがそもそもの、経済学に対する興味の出発点になったわけで、先程の弟の伝記によると、その数年後から、経済学についてのいろいろの研究を始めるようになったそうです。

リカードが経済について書いた最初の論文は、1809年の『モーニング・クロニクル』に書いた「金の価格」でありまして、これは匿名で発表したのですが、大変な評判になったものであります。公債引き受け業者としてのリカードの考え方というものがですね、こういうところに出ている。リカードはその後時論的な論文をずいぶん書いています。その頃のインフレーションとか、穀物価格の急騰、戦争による様々な経済的変動、そういうものに関わる論文がそうなんですが、それについては省略しましょう。伝記的なことはこれで最後にしますが、とにかく大変な金を儲けたものですから、リカードは業界から手を引いて、地主になってしまうのですね。1814年にギャトコム・パーク、そこに広大な土地を買い大地主となると年譜に書いておきましたが、ギャトコム・パークははっきり覚えてないのですけれども、現在はアン王女の土地になっているだろうと思いますが、大変に広い平野というか農地というのですかね、そういうものです。リカードはそこへ土地を買いまして地主になってしまうのです。それは当時進行し始めていた上層ユダヤ人の英国人への同化への道つまりジェントルマン化への道にほかなりません。そのようにしてリカードは公債引き受け業者というか金融業界からすっかり足を洗ってしまって、カウントリ・ジェントルマンになってしまうのですね。それで、今度は少しずつ経済学の勉強を始めて、経済学者になっていくということなのです。

1809年の『モーニング・クロニクル』に書いた「金の価格」という論文は、結局、イングランド銀行の銀行券に対する地金価格の騰貴といますか、あるいは、銀行券の減価といますか、まあ、それによる対外為替の下落、こういうような問題を扱っています。リカードは銀行券の減価を取り上げて、それが兌換停止下の銀行券の増発による

ものだ、不換銀行券の増発によるものだというようなことを言いまして、貨幣数量説的な理解かと思えますけれども、それで物価騰貴を説明する。そしてそれに対してどうしたらよいかという事で、戦争で停止されていた兌換の再開を主張しました。それ以下の何本かの論文もだいたいそういうような問題に関連してくるのですけれども、ここでは触れません。

当時のもう一つの大きな問題は、穀物価格が非常に変動したことです。これは、ナポレオンがイギリスを封鎖するというか、イギリスとの貿易をほとんどやめさせてしまうという事にも関係あるのですけれども、穀物価格が——天候の関係もありますけれども——非常に高くなって来る、そういうような事情についてどう考えたらよいかという事で、当時から議論がさまざま行われたのです。それに参加したリカードの有名な論文が、1815年の「安価な穀物が資本の利潤に及ぼす影響についての試論」——「利潤論」としばしば呼ばれていますけれども——この論文なのです。これがいってみれば、『経済学及び課税の原理』へ至る出発点になっている訳で、とても大事なんですね。これは、穀物価格が騰貴すると、それがどういう影響をもたらすか、穀物価格が騰貴する、それは当然食料の騰貴ですから、賃金に影響して来るわけですね。それは、当然賃金の騰貴を招く。賃金の騰貴を招いて、利潤が下落するということを、彼はこれで証明しているわけですが、その証明は、穀物という実物でもって行っている。ちょっと面倒ですが、収穫低減の法則によって単位面積当たりの収穫は減少するのに、賃金相当分の穀物量は一定で、しかも一般利潤率は農業によって規定されるので、利潤と賃金は反比例の関係におかれることになると言うのです。そのために、マルサスは、リカードに対して批判をする。もし、農業以外の価格が一斉に同じ比率で騰貴したならば、どうなるか。利潤率は同じ比率になってしまってもリカードの主張はダメになってしまうじゃないかというわけですね。そういうことを、それではどう反駁していくかということで、リカードは結局、労働価値説というものに進んでいって、それによってマルサスに反論していくという、そのことが結局『経済学原理』の形成に及んでいく訳なんです。それで、これ以上は専門的になり過ぎてここでは話が十分

できないかもしれないので、これで第一の部分を終えておいてですね、二番目の話の方に移ることにしたいと思うんです。

2

二番目の話というのは、リカードに対するジェームズ・ミルの影響という話なんです。特に、リカードが『経済学原理』を書くに至った経緯の中で、ジェームズ・ミルという人が非常に大きな地位を占めているということがあるからなのです。この年譜の方にもですね、1808年にジェームズ・ミルの『商業擁護論』を縁に、二人の終生の交遊が始まると書いてありますけれども、リカードにとって一番親しい友人は、このジェームズ・ミルだったんですね。もちろん、マルサス——これとも非常に親しい友人で論争相手だった。あるいは、マカロック——これもリカードのいわば弟子筋にあたる人ですけれども、リカードの理論を普及するに当たって大変な貢献のあった人ですけれども、こういう人も親しい友人ではある。しかし、ミルほど親しくはないですね。ジェームズ・ミルという人についての研究は、世界的にも、また日本でもあまり行われていないから、よく知られてはいないんですけれども、ごく最近、山下重一氏の『ジェイムズ・ミル』という本が出ました。ともあれミルは当時大変な影響力のある人でした。この人が『商業擁護論』というのを書きまして、そして、穀物価格の騰貴ということによってですね、地主が大きな利益を得るんだという事に対して非常に批判をしたんです。同じ思いを——但し理論的に——抱いていたリカードは、その本を読んで大いに賛同した。ミルを初めて知るんですね。この本はいわば共通の認識を元にしてできてゆく二人の友情のきっかけになったという点で重要な本といっていいでしょう。

あまり時間が無くて詳しいお話はできないんですけれども、ジェームズ・ミルという人はですね、スコットランドの非常に貧しい家に生まれた靴屋の倅なんです。長男として生まれた人なんですけれども、母親が大変な教育ママでありまして、頭が良いということで、店は次男に継がせるからおまえは勉強しなさいということで、勉強させて、当時庶民には珍しいグラマー・スクールにですね、そういう中産階級

以上でなくては行かないようなグラマー・スクールに通わせた。行った歳が少し遅いので、入れるのにも親の苦労があったんだろうと思うんですが、そういうところに入れて、そのうち、パトロンとしてですね、ジョン・スチュアート卿という、大地主ですね、その夫妻をパトロンの得まして、そして、そのパトロンの金でエジンバラ大学に入るというのがジェームズ・ミルの辿った道なんです。それで、修士号をとり、さらに、説教師というか牧師になるような、そういうコースに入るんですけども、ミルはそれをいやがって、資格は取ったものの職には就かず、サー・ジョンと一緒に、それが新しく国会議員になるものですから、議員のお供をしてロンドンに出て、ロンドンで評論家というか雑誌の編集者になって、それから著作活動に入っていくという、そういう人なんです。ちなみに、長男にジョン・スチュアート・ミルという名前を付けたのは、実はそのパトロンのサー・ジョン・スチュアート卿がゴッドファーザーだという、そういう関係があります。そういう苦労して、自分の頭脳ですね、頭角を現してきたミルは、地主階級に対する大変な敵意を持っている。そしてまた、ミルはやがてペンタムの教義を信奉したのです。ペンタムという人は、庵の中の隠者といわれまして外へ全然出てこないのですけれども、ペンタムの考え方はミルによってプロパゲイトされたといっている。ミルはペンタムの教義を布教するに際して非常に大きな役割を演じた人で、ペンタムの「副官」だと書いてある本もありますけれども、そういう重要な役割を演じた人です。ペンタム自身の言葉に「ジェームズ・ミルは自分の弟子で、そして、リカードがジェームズ・ミルの弟子だから、リカードは自分の孫だ」という有名な言葉がありますけれども、リカードもミルを通じて功利主義的な影響を受けたというか、まあ当時の民主主義的な改革運動に対する同情をリカードも示していた事は事実だと思います。ただどちらかといえば彼は理論的な分析から出発している。ジェームズ・ミルはとにかく非常にリカードに対して親密で、しかも一歳年下なのに教育者として影響力がある。

余談になりますけれど、ジェームズ・ミルは、東インド会社に就職するまでは非常に貧乏だったものですから、金持ちのリカードには自分の本なんかでもですね、贈呈しないでリカードに買ってくれというよ

うなことを言ったりしている訳です。やがて、ミルは、自分で書いた『英領インド史』という本で東インド会社に就職することができました、やがて社員としては、経営者、理事ではなくて、社員としては最高の地位に上がりまして、最後は年額二千ポンドの収入を得ました。二千ポンドというのは、大変な高額ですね。自分の息子のジョン・スチュアート・ミルも同じ会社で同じ地位に達して、辞める時やはり同じ二千ポンドの給料をもらっているんです。

ちょっと、これはさらに脇道にはいってしまいますが、マルクスがエンゲルスから三百五十ポンドの年金を個人的に終生もらっていた話は有名ですよ。もちろんマルクスはエンゲルスにものすごく感謝しています。当たり前です。それでもマルクスはいつも「貧乏だ貧乏だ」と文句を言ってたんですけれども、確かに、中産階級としての体面を保つにはとても不足だったと思いますが、労働者階級とすれば、勿論年に五十ポンドなんかとてももらってないんですから、そういうのと比べれば、三百五十ポンドというのはずいぶん大きいと思うんです。でも、ミル達とあまり時代が違わないとすると、千八百ポンドとか、二千ポンドという彼等のもらっていた額と比べて、確かにマルクスは少なくて文句言うのも無理ないかなと思ったりもするんですね。余談です。

話は戻りますが、リカードとミルは大変な親しい友人関係であった訳ですが、それが本当に確認されたのがリカードとミルとの往復書簡の発見なんです。先程言いましたリカードの『全集』が戦後出版されるんですけれども、その時に非常に大きな特徴とされたのはリカード文書の発見、あるいは、リカード＝ミル往復書簡の発見なんですね。リカード文書というのは、1930年にリカードの長男の住所であった所で発見された。リカードの受け取った手紙、マルサスから受け取ったマルサスの手紙、それから自分自身の手紙の写し、そういうものが大量に発見されました。また、マルサスの『経済学原理』への評注、あるいは遺稿となった「国立銀行設置試案」、そういうものが発見されました。それは1930年ですので、戦前に発表されました。ところがですね、リカード＝ミル往復書簡というのが、実は、1943年になってさらに新しく発見されたのです。これは、ジェームス・ミルから

息子のジョン・スチュアート・ミルの手元に渡り、さらにそれから、J.E. ケアンズの手元に渡ったものといわれております。そして、ケアンズの家で発見された。これも、同じく「国立銀行設立についての試案」それから「議会改革に関する文書」、そういうものが含まれていて、それも公刊されているわけですが、大きなのはやはりミルとリカードの往復書簡なんですね。これが発見されたと言うことが、ミルとリカードの関係についての戦後の研究をすすめる動機、——といっても、ハチソンのを除くと、ほとんどまだ研究が行われているとは言えませんが——研究に資するところが大きくなっているんじゃないかというふうに思うんです。

リカードとミルの関係については、もともとですね、ジョン・スチュアート・ミルの『自伝』なんかを見ると、事實はちゃんと書いてあるんです。ですから、かなり広く知られたことではあるけれども、手紙を読んでみるとかなり詳細が分かって来るんですね。先程ちょっと言いましたが、ミルと知り合いになったきっかけが、ミルが刊行した『商業擁護論』で、それにリカードが感心した。ミルの方もかねてよりリカードの論文を読んで非常に刺激を受けている。リカードの方もミルの主張に共感を寄せる。二人の間にですね、何かこう共通な関心がある。それは何かというと、地主に対する考え方なんですね。地主というものが、本当に不当な利益を得ている。そして、労働者と資本家との関係でいえば、それが対立関係であるというようにミルにはまだ見えていないんですけれども、そのおぼろげな兆候は無いわけではない。それはまだはっきりしないとしても、ただ、地主が不当に、たとえば穀物の騰貴によって、不当な利益を得ている事は知っている。リカードも同じように考えたんですが、ただ、ミルのほうはですね、ある意味じゃ政治的に考えてるんですね。物事をミルはいつも政治的変革という形で考えている。リカードの方は、経済学の理論で考えている。その違いがある。ミルはリカードの理論的分析を政治的に利用しようとする。アレヴィというフランス人の書いた有名な『哲学的急進主義の発展』という本によりますと、ミルはリカードをイギリスのケナーにしたかったのだそうです。實際上、そういうリカードの理論を元にして、自分たちの政治的な主張、民主主義的な主

張、かなり過激な主張——ペンタムは君主制も否定しようというほどの過激な主張の持主で、それを受け継いでいるミルですから、かなり過激な主張だったと思いますけれども——そういう地主批判の過激な主張の理論的な裏付けにしようとした、そういうきらいがあると思いますけれども、そういう点で、しかし非常に通底するところがある、底で繋がる場所があったんだろうとは思うんです。そういうことも多分あって、リカードとミルとは非常に接近してくる。

そしてミルは、リカードの、先ほど言いました1815年に書いた「利潤論」を読んで非常に刺激を受けて、リカードにおおいに勧めますね。これをもっと詳細に書きのばしなさいと。そして、もっとはっきりと議論を展開しなさいと。その結果として、生まれたのが『経済学原理』なんですね。その「利潤論」なる試論を書き直して、もっと詳細なものを書くようにつよく勧めたということがなかったならば、多分ですね、リカードの『原理』は、出てこなかっただろうと、私は思うんです。もちろん私だけでなく、その二人の関係を知れば、皆そう思うのです。リカードは非常に性格の優しい人でありまして、野心的なところの少ない人なんですね。穏やかな性格、しかし非常に頭の切れる人だったといわれていますけれども、そういう人が、敢えてそういう著述をするということについては、なかなか簡単にはできない。短い論文ならともかく、本を書くということになると自分の受けなかった教育という問題が障害に感じるんです。ミルにはそれは分かっていたと思いますけれど、敢えて無視して、リカードに対して、おおいに書きなさいと勧めました。「あなたが自分の名声を受ける事ができるだけでなく、人類の幸福を左右する科学を大いに改善する力を持っているんですよ」とミルはいうんです。リカードはそういわれて喜びはするんですが、遠慮深いですね。しかし「成功するかどうか、賭けてみる」と一応は受けるんです。でも「私の意見がどんなに正しくても、名声と卓越を与えてくれるような著作を書く幸運には恵まれそうにない」と弱音を漏らします。ミルはリカードが「私に本を書く力があつたらなあ」といった言葉を取り上げて、叱るんです。そんなことを言っちゃいけない、とにかく書きなさい、「あなたには自信の欠如以外には何の障害もありません」。私はなんでも手伝ってあ

げましょう、とにかく友達に手紙を送るような気持で、思いついたことをどんどんまとめて書きなさい、書いたら私に送りなさい、私がそれを整理して、うまく書き直すなり、なんなのことをしてあげましょう、というようなことをしきりに言うんですね。「自分は学校教師の立場であなたに強制します」などとも言っています。それで、リカードもその気になって、一生懸命書く。原稿を書き続けて行くんですね。ただし、その原稿はだいたい溜まったにもかかわらず、それを送ることはなかなかしなかった。というのは、リカードはその時に非常に重要な理論的な問題に逢着してなかなか先へ進めなくなったんです。それはミルが冗談で言っているような「怠惰を正統化するための巧妙な口実」でないことは確かです。それはリカードが手紙の中でいっている「賃金の騰貴が、主として機械及び固定資本の助けによって獲得される諸商品の価格にもたらす奇妙な効果」というものに関わりがあるというように言われていることなんですけれども、それこそ、アダム・スミス以来の経済学の常識を根底から覆してしまうような、そういう結論になってくるものなんです。そういう問題をリカードは一生懸命考えていたものですから、なかなか、ミルに見せなかったという事だったんです。結局、リカードは二度に分けて内容を送り、それに対するコメントをミルに求めます。ミルは内容のレジュメ作って、感想を述べていますけれども、批評はありません。最終的にリカードは1817年に『経済学および課税の原理』を刊行するんですけども、ミルとの往復書簡をずっと見ていくと分かるのは、非常に激励の言葉があるし、ほんとにそれが無かったら、自分はこれを出せなかったと、ミルに対するリカードの非常に深い感謝の気持ちが残ってるんですけれども、内容的にいうと、ミルは何も貢献していないと思いますね。索引が初版に付いていて、索引を作ったのはミルだと言われてはいますが、本文の内容について、つまり、経済学の内容については、ミルはリカードに何も言う事はできない。今やとうてい及ばない訳ですから。ミルが何か内容的にアドバイスすることなんかはできない。実際リカードは、そこでミルの水準をはるかに超えて経済学の革新を成し遂げていくわけですから、ミルにそんなことができないのは当然かもしれませんけれども、ただ、精神的な支えには非常になっ

ているんですね。先ほど言いましたけれども、高等教育をリカードは受けていない。そのことが、絶えざるコンプレックスですね。ミルにはそれは十分わかるだろうと思うんです。先程ちょっと紹介しましたように、ミルは自分の家庭が非常に貧しい家庭であるにもかかわらず、パトロンを得て、たまたまエジンバラの大学で学んで最高の教育を受けた。そういう人間であればこそ、リカードのそういう気持ちが分かったのかもしれませんが、とにかく、叱咤激励してですね、宿題を出す。こういう風にやちなさい、まずこういうことをこういう風には書きなさい、ああいうふうには書きなさい、ということを非常に詳細に手紙で伝えていますね。リカードがそれにどういうふうに従ったのかは、もちろん分かりませんが、とにかく不平不満を持たず書いた。そして、最後には原稿を送って、ミルの意見を聞いているんですけど、ミルはこれは非常に良く書いてますっていうようなことしか言わないから、理論の内容について批判的なことはほとんど残ってません。ただ、まあ、おおいに激励してくれた。激励してくれることによって、ついにリカードは先程言った「奇妙な効果」というものについて、解決をして、とにかく本をまとめることができたわけなんです。この「奇妙な効果」というのは、結局、不変の価値尺度の問題になるんですが、それは価値論の修正の問題にも関係するし、あるいはマルクス経済学でいうと、いわゆる転形問題の問題や総計一致命題の問題にも関わってきますし、現代的に言えば、マルクスの価値論の批判の問題に繋がってくる。全部、この非常に興味深い経済学説史の大きなテーマに関係するわけですが、その事がリカードの経済学全体を通じての問題点となるわけです。

結局、「奇妙な効果」に関わるわけですが、リカードの経済学が今までの経済学とどう違うかという点、賃金が騰貴するとあらゆる商品の物価が上がる、というのがそれまでの経済学の考え方だったのに対して、リカードは『経済学原理』初版において、賃金騰貴はあらゆる物価を引き下げてしまう、といったわけですね。ぜんぜん逆になる訳なんですね。今までは、賃金が上がるとあらゆる物価は上がるんだと言ったのに、リカードは、賃金が上がるとあらゆる物価を押し下げてしまう、という非常に変わった、それこそ「奇妙な」結論を引き

出します。勿論、それには理論的なカラクリがありまして、不変の価値尺度という設定がありまして、その前提にのっとった上での話ですが、そういう結論をそこに出すんですね。その点がまた、第三版になると変わってきて、賃金騰貴によって価格の上がるものと下がるものが出てきて、全体として相殺されるという考えに変わってきます。不変の価値尺度の設定の条件の変更に関わってくるのですが、これも大変に大きな経済学の問題であろうと思います。時間があれば後で触れたいと思います。結構、理論的で難しい問題も混ざっていたのに、非常にあっさりと簡単にしかお話できませんで申し訳ありませんけれども、二番目の問題はそれくらいにしたいと思います。

なお、二番目の問題に、最後にちょっと一言付け加えておきますけれども、先程言いましたように、ミルは自分の政治的な主張及び行動に役立てるべくリカードを利用したというのは、言葉は悪いんですけども、事実そういう意図があったんですね。ですから、リカードが『経済学原理』を書き上げると、もう、理論はあなたはやらなくなっていていいんだ、お金も作った、理論も作った、その次にやることは、あなたが今度は政治家になって世の中を変える事だ、というんです。そういうことで、今度はリカードに政治家になることを勧めるんですね。リカードはそれに対して、それこそとんでもない、自分が一番向きなのは政治家になることだ、と強く辞退するんですね。いやがって、辞退するんですけども、しかし結局、押し切られてしまって、リカードは今度はいわゆる腐敗選挙区の一つを買い占めて、そして、下院議員になるわけです。だからリカードの晩年は、下院議員としての活躍ということです。これは、ホイッグでもトーリーでもない、まったく第三の道、非常に民主主義的な主張、しかも自分の個人的な利益というものを一切無視した、非常に客観的な立場で様々な主張をしまして、その記録も『リカード全集』の一冊の中に演説の要旨など収められています。これはリカードの政治家としての卓越した面を示したもので、これまた、興味深いものですが、ここでは割愛しますが、とにかくミルはリカードをフランスのケネーと同じように、イギリスのケネーにして、さらに、第一級の政治家として育てていきたいというように考えたわけですね。ですけど残念ながら、若くして、

五十一歳でリカードは突然死んでしまいます。ミルのショックはいうまでもありません。しかしともかくそういうことをミルはやったというのを付け加えて、三番目の話に進みたいと思います。

3

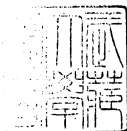
三番目はですね、『経済学原理』の初版、再版、三版の異同ということなんですけれども、皆様のお手元用に資料を作りました。最初にちょっと申し上げておきたいのは、細かなことで、これまた書誌学的ということになるかもしれません。みなさんの方に、“political economy, and taxation”の扉の写真、コピーがあるかと思うんですが、ここで、すぐお気づきになるかと思うんですけれども、political

ON
THE PRINCIPLES
OF
POLITICAL ECONOMY,
AND
TAXATION.

By DAVID RICARDO, Esq.

LONDON:

JOHN MURRAY, ALBEMARLE-STREET.



232516E

1817.

economy の次にカンマが付いて
おります。で、and taxation. と
なっております。それで、再
版、三版いずれもコピーが付け
てありますから御覧いただきた
いのですが、再版の方は、これ
も同じく economy の後にカン
マが付いております。それか
ら、第三版もありますが、そこ
も economy の次にカンマが付
いております。このカンマがあ
るということがですね、リカー
ドの『原理』の羽鳥、吉沢氏訳
の岩波文庫版の——今出ている
岩波文庫版で、上下二冊で出て
おりますけれども——その上巻
の一番最後の解題の所で吉沢氏
によって指摘されているわけ
です。ちょっと読んでみますと、
「このような書名の記し方は、

『経済学の原理』と『課税の原理』との関係についての、原著者独自の考え方を反映しているのではないだろうか。おそらく原著者は、彼独自の『経済学の原理』の体系化を企てるに当たって、その体系の中に課税論や国家論を包含すべきではないと考えていたのだろう——こういうふうに書いてある。マルクスの「プラン問題」のようなことを考えているのかと、とても妙な気がしましたが、カンマのことは初耳でした。あるいはカンマについて指摘した人は、今までに居たのかもしれませんが。私はそういうことをあまり知らないんですが、これで初めて知った。

これについては、『図書』にですね、ちょうどこの翻訳が出た時に、ロンドン大学の名誉教授の森嶋通夫さんがエッセイを書いているんです。それで、このカンマについてイギリスの三人の学者に聞いてみた。そうすると、カンマが有ると無いとじゃ大違いだ、意味が全然違う。森嶋さんは最終的に principles of political economy を経済学と訳して、そして、課税と訳している、「経済学と課税」——こういうようにすべきだというのが、森嶋さんの意見だと思います。イギリスの三人の——ヒックスを含めた三人ですけども——人に聞くと、みんなカンマが無ければ確かに political economy と taxation の principle, 両方の原理になるけれども、カンマがあれば、経済学の原理と課税になるんだ、全然意味が違って来る、と三人が同じように答えたということを紹介しているんですね。一体これはどうなんだというのが、非常に興味を感じた理由です。カンマを付けたり、ピリオドを付けたりということは、当時の習慣かもしれませんが。今の本にはありません。たとえば先程ちょっと挙げましたけれど、ゴンナーという人の編集した『原理』にはカンマはありません。それから、スラッフア自身が『リカード全集』を編集しているんですけども、初版、再版などの写真版にはそのまま、カンマは写真版だから当然載っているんですけども、自分の編集した定本の扉にはカンマもなにも付けてないんですね。そして、現在売られているリカードの『原理』のペンギン版みたいな本を見ても、カンマは表紙にはないが、扉にはあったり、何かはつきりしないんです。全然意識されていないっていうことなんですね。ですけど、もしカンマがあることによって意味が違うといった

ら、これはかなり大変なことですよ。私は、『経済学原理及び課税』というふうに訳すべきなのか、『経済学及び課税の原理』と訳すべきなのか、悩まなくてはならない。まあ、経済学の原理、principles of political economy というのは、経済の原理なのか、経済の原理というのは経済学のことですね。だから、経済学という風に訳すべきだという森嶋さんの意見は、なかなか私には説得的だと思うんですけども、しかし、political economy だけでも経済学と訳しても良い場合がしばしばありますね。だからまあ、それは経済学の原理と訳そうが、経済の原理、あるいは経済学として訳そうが、それはどちらでも良いんですけども、and taxation の前にカンマがあるというのはどういう意味だと考えるかというのは、一つの書誌学的な課題じゃないかということ、問題を提起しておきたいと思うんです。

私はですね、それを読んだ時に、扉を三種類並べて比べまして、どこか違いがあるだろうか、そうしたらやっぱり扉ですね、活字の大きさに違いがあるんです。ご覧になっていただきますと、初版の political economy というのは、一段と大きい活字で組んである。私は物差しを出しまして、計ってみたら五ミリあるんです。ところが、principles と taxation の方は四ミリしかない。Political economy が五ミリであとは四ミリしかないとする、やっぱり political economy というのがこの本の題なんじゃないかというふうに思いました。ところがですね、二版と三版を見ますと、そんなこと全然こだわりのないのかもしれないけれども、taxation と political economy が同じ大きさの活字で組んでいて、principles が小さいんですね。それで、第三版を見るとどうかというと、三版も同じように political economy と taxation が同じ活字で principles が小さい。これは今まで指摘されたのを見たことがないので、私が発見したといってもいいことで、したがって、実にくだらないことかもしれませんが、それにしてもこういうのは誰が考えるのか、多分印刷屋が考えることで、著者は考えないのかもしれないとも思いますけれども、しかし、大事なのは初版だろうと、著者の意向がもし出ているとすれば、初版が一番大事なのかと思いますけれども、他方、初版がこれではまずいということで直してもらったということもあり得る。そういうことで、私は分かりません

が、とにかくそういう面白い発見も活字で組まれた本にはあるんですね。電子情報がこれからは情報として活発に入ってくると言われても、こういう活字の大きさまでは多分電子情報には入ってこないで、全部そのままデジタルで処理されるのでしょうか。画像処理なら大丈夫でしょうかね。ともかく、そういうこともやっぱり厳密にやる必要があるのではないかと、思いましたね。カンマなんてどこかにすっ飛んで行ってしまうだろうと思ったんです。現在はカンマを入れないで書名は全部出てますからね。そうした場合に、カンマが実は大きな意味を持つということも絶対ないとは言えない。『原理』の翻訳者が書いているんですけども、principles of taxationという言葉はこの本の中に一回も出てこない。一回も出てこなければその言葉はないと考えるのも普通かもしれないと思いました。私は、言語学を勉強している人間、経済学なんか何にも知らない人間に聞いたんですけども、これはどうやって訳すんだろうか、カンマがここにあるんだけどと言ったら、「経済学の原理と課税じゃないですか」とあっさり答えたんですね。「課税に原理なんかあるんですか」なんて余計なことまでついでに言われました。そんなことで、つまらない話かもしれないんですけども、ちょっと面白かった。先ほど頂いたばかりなんですけれども、『原理』の初版が現在三百五十万円しているという丸善の販売カタログですが、ここにはちゃんとカンマが入っているんですね。Principles of political enocomy カンマ and taxation 三百五十万円と書いてある。ずいぶん高いなと驚きながら、これはまた厳密だなと思って感心した次第です。

ちょっと瑣末な雑談になりまして、申し訳ありませんけれども、そんなことを考えながら、初版、再版、三版の事をお話したいと思うんです。初版が出ましたが、1817年の4月19日だと言われているんです。書誌学的に、これが何時刊行されたかっていうことを細かく確定して書いたりしなくてはならないことがあるのかもしれませんが、何時出たかなんていうことは、本当にはほとんど分かりませんね。リカードの時代に、4月19日に出たことが何故分かったかという、分かったといっても本当にそうなのかどうか分かりませんが、新聞に出た広告で分かるというのですね。『サンデー・アンド・タイムズ』で

CONTENTS.

CHAP.		Page
I.	<i>On Value</i>	1
II.	<i>On Rent</i>	49
III.	<i>On the Rent of Mines</i>	77
IV.	<i>On Natural and Market Price</i>	82
V.	<i>On Wages</i>	90
V*.	<i>On Profits</i>	116
VI.	<i>On Foreign Trade</i>	146
VII.	<i>On Taxes</i>	186
VIII.	<i>Taxes on Raw Produce</i>	194
VIII*.	<i>Taxes on Rent</i>	221
IX.	<i>Tithes</i>	225

したかね、『ニュー・タイムズ』でしたかね、その広告にその日に出ると予告してあったから、だから、4月19日に発行したと決めるんだというだけの話らしいですけれども、日本の本でも、今でも、何時、本が出版されたか記録にとどめるのはとても難しいことだろうと思います。

ます。ともあれそういうふうにはリカードの本についてははいわれている訳であります。

それで、初版と再版の違いというところでお話しをしなければならぬのですが、お手元の資料で、真っ先に気がつくだろうと思われる点はですね、初版には、第五章というのが二つあるんですね。それから、第八章というのも二つあるんです。こんなむちゃくちゃな本というのは、ほとんど見たことがない。目次を見ると、二つ目の五章にアステリスクのような印が付いている。二つ目の第八章にも印が付いていて、こちらは本文の章の頭にも同じ印が付いている。注意を喚起しているんでしょう。これは一体どういうことなのか、何故こんなことになったのかということですね。目次を見ると、全体が二十九章からなっているということですから、実際は二章余計にダブリがありますから、三十一章なんですね。これが初版の大きな特徴ですね。再版、つまり第二版になりますと、目次で三十一章ありますね。これはご覧になれば分かりますように、二つあった章が一つずつ順送りにされて、五章が二つあたのが五章と六章になっている、八章が二つあったのが後ろに送られて、九章と十章になっているという違いがあるんです。これもまた、実際どうしてこういうふうになったのかなと

思いますね。なお、第七章の目次のコピーに on Capital と書いてありますが、これは実はリプリントというか初版の本物じゃなくて、本物から複写したファクシミリ版のコピーで、誰かが初版に書き込みをしたのがそのままここに写されてるんだと思います。私が持っている他のファクシミリ版にはこんなものは入っておりません。ですから、個人的な書き込みだと思います。それで、どうしてこんな風になっているのかと言うことなんですけれども、なかなか見てみると面白いんですね。

まず、これはもともと第四章として一緒になっていたものが、校正段階で四章と五章との二つにに分けられたんだろうと考えられています。最初の五章というのが、原文の90ページから始まっているわけなんですけれども、第四章の最後の89ページの下が空白になっている。実はですね、この89ページの下空白の所に90ページから始まる第五章部分が入っていたんだというように言われていまして、それを削り取ってですね、次のページ立てにして上の空いた所に、Chapter V これを入れたんだと、意外に簡単に上手くできたということですね、これは。ただ同じ番号の章が二つあるということになってしまったが、技術的には苦労はない。全紙に印刷されて、それが折られて製本されているということは明らかです。ところがですね、二つある第八章の方はそうはいかなかった。第八章の方に入っていたものを一部分けて新しく追加した第八章にしたようなんですが、今度はもっと後で治したせいか、技術的に苦労するんです。原文の224ページをちょっと見ていただきたいのですが、ここが第二の第八章の一番最後になっているんです。この最後まで、活字を全部送ったんですね。送って、新しい方の二番目の第八章というのが、221ページから224ページまでがあるんですけれども、この最後のページの最後の行まで送っても足りなかったものですから、やむを得ずこの第八章と書いてある最初の見出しのところの余白が他のものと比べて非常に小さくなっていることがお分かりだと思うんです。たとえば、第九章と書いてあるところの本文が始まるまでの余白と比べると非常に小さくなっていることが分かるだろうと思います。それは、詰めても詰めても詰めきれなくて、やむを得ず上に上がってきた、221ページの本文が後ろ

から押されて上に上がってきたためにこういう形になったということなんです。新しい第八章については、初版をばらしてみると、あとから切って糊で貼り付けたということが分かってるんですね。ですから、第八章については、校正の時でなく、後から直したことになります。製本がすんだものをもう一度切りとって後から印刷したものを挿入したということが、そういう推理が成り立つわけですね。

『リカード全集』の編集者のスラッフアは、その推理を書いてるんですけども、後に実際にそれが明らかになった。というのは、貼ってない、一部しか貼ってない本が、アメリカのコロンビア大学の蔵書の中に発見されたんですね。後から貼るべきものが挟まっていて、まだ完全に新しいようにまだ直されていなかった本が一冊あったんですね。一部は直されていたけれども、三ページですか四ページですか、その部分全部がまだ直されていないで、紙を折って本に挟んであった。その本が発見されたことによって、自分の推理が正しかったと、スラッフアは非常にうれしそうに『リカード全集』の序文の補遺に記している所があります。こんなことで、リカード『原理』の初版の特徴というのは、非常にそういう点でユニークなもので、そんな奇妙な本は滅多にないと思われるほどで、とくに八章の方は多分リカードが印刷された時点でおかしいということに気が付いて、そして改善したのだらうと思いますね。校正の時点ではなくて、印刷されて始めて気が付いた。それで、第八章の方はもう直しようがなくて急遽貼付けた。そういうことがこれで分かる。書誌学的にいても珍しい本であるといっているのではないのでしょうか。それで、時間もあまりありませんので、これ以上のお話は省略します。

さて、再版の方をちょっと見ていただきたいと思います。再版の方は、蔵書票が、多分木版と思うのですが、貼り付けてありますね。これは、ミリセント・ギャレット・フォーセット、有名なヘンリー・フォーセット——マーシャルの前任者であるケンブリッジ大学のプロフェッサーであるヘンリー・フォーセットという全盲の経済学者として有名な、その人の奥さんの蔵書です。彼女は同時に自身も経済学者で、啓蒙的な経済学の本を何冊も書いておりますけれども、数少ない女流の経済学者で、なおかつ婦人参政権の活動家としてもはなはだ著

名人です。ただし、比較的穏健な改革派の方の人です。当時、過激なグループと二つありましたけれども、過激なグループの方じゃなくて、穏健派の婦人参政権の活動家でありました。この人の蔵書がたまたま武蔵大学にあるということで、これはわが図書館がここでちょっと自慢したわけですね。それが多分コピーした理由です。さて再版の方は、先程いったような章のダブリ、そういうものは完全に無くなっているということをご確認いただければ良いということと、目次の終わった右側の on value, 第一章「価値について」というところが、section 1, 2,...というように節に分かれるようになっているのが、第二版の大きな特徴です。

それから、第三版についても申し上げますけれども、第三版は目次でご覧いただければ分かりますように、大きな特徴は三十一章 on machinery を全く新たに加えたということです。これは、初版、再版には無い新しい章です。したがって、初版は二十九章プラス二、それから二版は三十一章、三版は三十二章ということになります。第三版は、機械の労働者に与える影響を論じた「機械論」が加えられたということと、もう一つは、価値論が第二版と同じように節に分かれているんですけども、それが二つばかり増えている。そういう点の違いがあります。まとめたものがありますので、ご覧いただければお分かりかと思います。初版から、二版、三版への変化ですね、まず三版で三十一章「機械論」が加わっているということと、初版の五章、五章、八章、八章というのが五章、六章と九章、十章と直されているということです。それから、第一章については、第三版では二版にあった第一節から新しい第二節が分離しているということと第六節の「不変の価値尺度について」が入って全部で七節になったということです。

それで、時間が無いので、ここで詳しくお話することは割愛しなければならぬのですけれども、先ほど言いました、リカードが気が付いてなかなか解決に手間取ったという問題について最後に少しだけお話しておきたいと思います。初版と三版の大きな違いでもあるからです。賃金騰落によって物価がどう変動するか、これはマルサスとの論争の中で出てきた大きな問題だったのですが、初版においてはす

ね、リカードは価値の尺度とする金の生産というものをアンアシステッド・レイバー、つまり、労働手段の助けを全く借りない労働、つまり労働だけで金が作れると仮定することによって自説を主張したのです。貨幣材料が金で作られると仮定し、それを価値尺度として諸商品の価値を計ると、それらの商品はみな生産手段を使っておりますので、生産手段を使うことによって、マルクス経済学的な用語を使えば、貨幣材料よりも有機的構成が高いということによって、賃金騰貴の結果、自分自身を除いた全ての物価が相対的に下落するというのがリカードが初版で主張した結論なんですね。それは先程言いましたように、アダム・スミス以来の伝統的な経済学と全く反する結論だった。ところが、第三版になりますと、不変の価値尺度の条件の設定を変えまして、マルクスの言葉で言えば、資本の有機的構成を中位に、平均に置くという設定に変えるんですね。リカード的にいえば回転期間で、それが中位、資本構成でいいかえれば有機的構成が中位だ、たとえば金なら金の中位的な生産条件で作られたというように条件の設定を変えますと、賃金騰落の影響は全然別な形になる。有機的な構成がそれより高いもの、あるいは回転期間がそれより長いものについては、確かに賃金騰貴によってそれらの製品は下がる。しかしそうでないもの、尺度にする金の生産条件よりも、もっと生産期間が短くて有機的構成の低いものについて見れば、やはり上がるんだ、賃金が騰貴すればそういうものの物価は上がるんだ。上がるものと下がるものと両方あるんだ。上がるものと下がるものを合計すると均衡するということはリカードははっきり言いませんでしたけれども、価値尺度は事実上中位に設定されているんです。ジェームズ・ミルは後にリカードのその考えを受け継ぎまして、全体を足すと同じになるんだという考え方を彼の『経済学要綱』の中でははっきり言っています。それは後のマルクスの生産価格と価値との関係における総計一致命題に繋がる道筋を用意しているのかもしれませんが。そういうふうに、初版と再版では変わる、これは大きな問題ですね。同時に、リカードは賃金騰落の価値の及ぼす影響ということで、その事の議論をするんですけども、同時に、初版、二版までには無かった新しい議論を第三版ではやることになるんです。これもとても大きな問題です。この点も

お話しておきましょう。

リカードは価値論の修正、つまり投下労働量によって価値が変わるという考え方は、修正されなくてはならない、賃金の騰落は生産の条件の違いというものによって、各商品に異なった影響を与えるということで、その問題を最初は解くのですけれども、第三版になると賃金騰落と全く無関係に、資本の回転期間が長いかどうか、生産の期間が長いか短いによって価値論は修正される、あるいは別な表現によると、投下労働量と「時間」によって、価値はその二つの要因で決まるというようにリカードは言うようになるんですね。これはリカードにとっても必ずしも一般的な言い方ではなくて、ある手紙の中でそういう言葉を使っているだけなのですけれども、労働だけで決まらない、もう一つの要因によっても決まる、というのは労働価値説にとっては大変な問題なのです。もちろんリカードはあくまでも基本は労働量によって決まる、というのです。比較的最近に、アメリカのスティグラールという経済学者が93パーセントの労働価値説というような表現で、リカードの価値論を皮肉というか評したことがありますけれども、93パーセントかどうかは別として、大部分は労働によって決定されるけれども、それが若干修正されるという考え方を、リカードは第三版で明確に打ち出してくるんですね。マルクスのいえば価値と生産価格との区別の問題です。リカード自身は賃金の騰落の影響と、その本来の価値修正の問題との区別が十分頭の中でできてないのですけれども、それをなんとかやるんですね。リカードはさらにその問題を追究しまして、1823年、リカードが死ぬ年ですけれども、「交換価値と絶対価値」という論文を書くのです。書いてもちっとも解決に至らないという悩みを残しながら死んでいく訳ですけれども、遺稿が二つ残っています。一つは草稿で一応完成している、一つはそれを書き直したものですけれども、未定稿のまま終わっています。そういう論文を書いて、結局価値論の修正問題というのは、リカードの最後まで頭を悩まして解決できなかった問題として残されてしまった。それは第三版で、いわば始めて出された問題です。その難問の解決はリカードの弟子のミルやマカロックに任されるわけですが成功せず、さらにマルクスに委ねられるといいいいでしょう。あるいはスラファも、

ある意味ではリカードの残した問題を受け継いで展開しているとい
ていいと思います。

私は一番始めに、修士論文を書いた時にリカードを扱ったと言いま
したけれども、その時私にはちょっとしたエピソードがあります。私
は指導教授が宇野弘蔵先生だったものですから、宇野先生のところに
リカードの価値修正論——第三版と初版の修正論との比較を含む——
を扱ったリカードの論文を出したのですけれども、その時に宇野先生
から「初めて分かったよ」と言われたのですね。それはどういうこと
かという、マルクスの『経済学批判』という本の中に学説史を少し
扱ったところがありまして、リカードのことをちょっと書いてあるの
です。マルクスは「リカードは初期未開社会の漁夫と獵師とが自分の
労働手段の計算のために、1817年にロンドン取引所で使われている金
利計算表を使うという時代錯誤に陥っている」という言葉を、その中
に書いているのですけれども、宇野先生は「自分は読んでも、その
意味がよく分からなかった。だけど、君の論文で初版を紹介してくれ
たので、金利表を使った説明が初版には出ているということが分かっ
たよ」と言われまして、多分、先生が興味をもったのはそこだけで、
ほかには評価すべきことがなかったもので、それだけで通してくださ
ったのかもしれませんが、それが私の忘れ難いおよそ四十年前の
思い出になっているわけです。もっとも、締切日が過ぎてから、私は
なんとか転形問題についての論文をまとめて、もちろん修士論文には
関係なくなっていました。が、宇野先生に読んでいただいたことも付け
加えておいたほうがいいでしょう。それが私の活字になった最初の論
文になったわけです。すっかり思い出話になって恐縮です。

さて、時間が来ましたので、この辺でやめなくてはならないのは残
念ですけれども、だいたい私が言いたかったことのうちの大半はお話
できたということで我慢しなくてはならないと思います。どうも不手
際できちんと分かりやすくお話できなくて申し訳ありませんが、何か
のお役に立つところが少しでもあれば幸いです。どうも長時間お聞き
頂きましてありがとうございました。

〈追記〉文献は一々挙げませんが、『リカード全集』Iの編者「序言」にたよる所が多かったので、とくに挙げておきます。また、J. ミルとリカードとの『経済学原理』をめぐる交渉については、私の『イギリス古典経済学の方法と課題』（ミネルヴァ書房、1988年）の第2章に詳しく書いてありますので、興味のある方はご参照下さい。